

## 汎用自動分析装置を用いた「Nタイプ ナノピア IL-2R」の基礎的検討

◎岩渕 菜摘<sup>1)</sup>、直井 健治<sup>1)</sup>、河端 正樹<sup>1)</sup>、古桑 美香<sup>1)</sup>、平澤 茉名人<sup>1)</sup>  
防衛医科大学校病院<sup>1)</sup>

【はじめに】可溶性インターロイキン2受容体(sIL-2R)は、活性化T細胞やB細胞、悪性腫瘍などに発現しているIL-2受容体の $\alpha$ 鎖(CD25)が血中に遊離したものである。血中sIL-2Rは非ホジキンリンパ腫や成人T細胞性白血病などにおいて、腫瘍細胞の増殖を反映することが知られており、これら疾患の診断や化学療法後の再発・再燃のモニター時にマーカーとして利用されている。今回我々は従来品より非特異反応を抑制したNタイプ ナノピア IL-2R(積水メディカル株式会社)の検討する機会を得たので報告する。

## 【方法と結果】

測定機器はLabospect008(日立ハイテク)を使用した。対象試薬はナノピア IL-2R(改良前試薬)とルミパルスプレスト IL-2R(従来法)(富士レビオ株式会社)を使用した。1. 併行精度：コントロール2濃度を20回連続測定した結果CV1.35~3.48%であった。2. 室内再現精度：コントロール2濃度を初日にキャリブレーションを行い1日2回7日間測定した結果CV1.10~2.44%であった。3. 希釈直線性：高濃度検体を段階希釈した結果7318U/mLまで直線性が認め

られた。4. プロゾーン：約12000U/mLまでプロゾーンがないことを確認した。5. 最小検出感度： $\pm 2.6SD$ 法を用いて測定した結果110U/mLであった。6. 共存物質の影響：干渉チェックAプラス、RFプラス(シスメックス株式会社)を用いて抱合型・遊離型ビリルビン20mg/dL、溶血ヘモグロビン500mg/dL、乳び1500ホルマジン濁度、RF500U/Lまで影響を認めなかった。7. 相関性：当院患者血清(n=112)を使用し、従来法と比較した。相関係数0.992、回帰式 $y=1.05x+80.19$ であった。改良前試薬との相関は相関係数0.977、回帰式 $y=1.08x-16.86$ であった。また、改良前試薬との相関で乖離する検体が1件認められた。

## 【まとめ】

Nタイプ ナノピア IL-2Rの基礎的検討の結果、併行精度、室内再現精度、共存物質の影響はいずれも良好であった。改良前試薬との相関で乖離した1件は従来法に近く、非特異反応を抑制したと考えられる。汎用測定機器でsIL-2Rが測定できるのは検査時間が短縮できるため、臨床への貢献が期待される。連絡先 04-2995-1511 (内線3214)